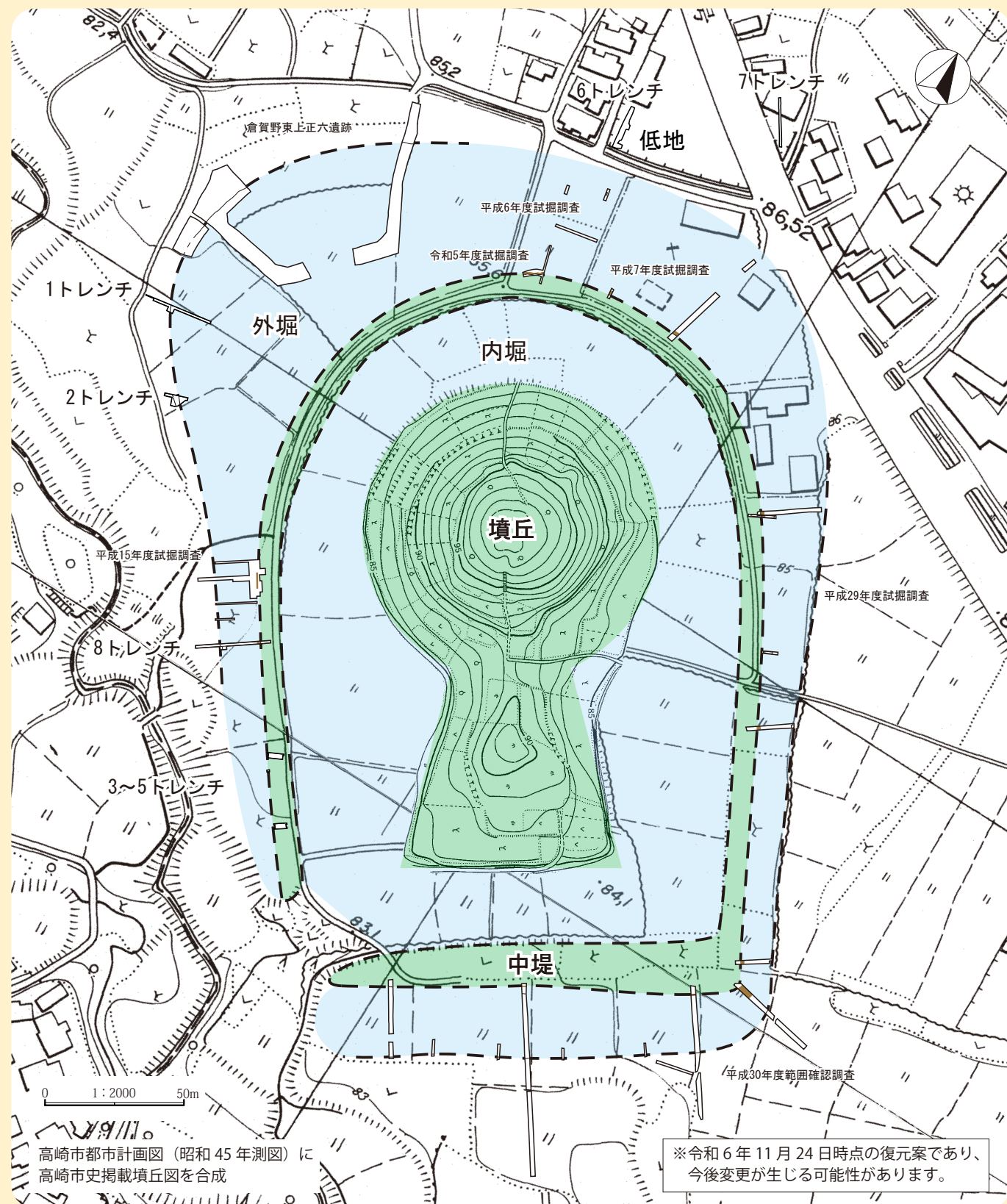


推定される古墳の範囲

令和4年度から令和6年度までの調査成果により、浅間山古墳の外堀はほぼ全周することが確認されました。形状は墳丘の東西側の幅が狭く、後円部の西側が大きく外に広がっていました。外堀の一部が広がる理由については、墳丘を構築する際に追加で土が必要になったため余分に掘削したことなどが考えられますが、今後の検討課題となっています。いずれにしても、4世紀後半頃において二重の周堀は全国的にも最先端の構造であり、墳丘の規模や形状も含めた研究から、ヤマト王権と深い関わりがあったことが推察されています。



令和6年度 浅間山古墳発掘調査報告会資料

会場：高崎市中央公民館集会ホール 開催日：令和6年11月24日(日)

事業の概要

高崎市教育委員会では、国史跡^{せんげんやま}浅間山古墳において古墳の範囲を明らかにするための調査を令和4年度から実施しています。これまでの調査により、浅間山古墳は墳丘^{ふんきゅう}の周りに二重の周堀^{しゅうぼり}（内堀・外堀）を持つ格調高い古墳であることが明らかになってきていましたが、西側の外堀の状況が不明確なままでした。そこで令和6年度は墳丘西側の外堀の構造を探るための調査を行い、内堀と外堀の間をめぐる土手^{ちゆうてい}（中堤^{ふきいし}）、その斜面に積まれた葺石、そして外堀の範囲を確認することができました。この成果により、外堀を含めた浅間山古墳の範囲をおおよそ特定することができました。

浅間山古墳周辺の古墳分布

浅間山古墳の西側には粕沢川^{かすざわ}が流れており、この両岸には古墳時代前期から中期の古墳が密集しています。古墳時代前期の古墳が狭い地域に集中することは珍しく、特に東日本ではあまり例を見ません。この地域は当時における最重要地域であり、その盟主墳^{めいしゅ}が浅間山古墳であったと推測されます。

- 1 浅間山古墳（4世紀後半頃）
墳形：前方後円墳 墳長171.5m
出土品：円筒埴輪、形象埴輪
- 2 庚申塚古墳（4世紀後半頃）
墳形：円墳 墳径約50m
出土品：伝 銅鏡、鉄剣、鉄刀
- 3 大山古墳（4世紀後半頃）
墳形：円墳 墳径約60m
出土品：伝 銅鏡、石製模造品
- 4 茶臼山古墳（4世紀後半頃）消滅
墳形：円墳 墳径約60m
出土品：伝 琴柱形石製品
- 5 大鶴巻古墳（4世紀後半頃）
墳形：前方後円墳 墳長123m
出土品：円筒埴輪、形象埴輪
- 6 小鶴巻古墳（5世紀後半頃）
墳形：前方後円墳 墳長87.5m
主体部：舟形石棺 出土品：円筒埴輪



1961(昭和36年6月)撮影
(航空写真：国土地理院空中写真webサービスより引用)

令和6年度の調査の概要（8トレンチ）

令和6年度は墳丘西側の外堀を確認するため、8トレンチを設定して調査を行いました。その結果、中堤とその斜面の葦石、外堀の立ち上がりを確認することができました。トレンチの東端では地表面からわずか10cm下から中堤上面が確認されました。その西側に外堀が掘削されており、幅約15m、中堤上面からの深さは約1mとなっています。周堀内に堆積した埋土^{まいど}の中からは土師器^{はじき}の壺や高坏^{たかつき}などが出土しており、いずれも古墳時代前期のものと考えられます。

中堤の西側斜面の中間あたりまでには葦石が積まれていました。中堤上面に向かうにつれ傾斜がゆるくなっており、確認された中堤上面は本来の高さに近いものと思われます。中堤の構造を確認するためトレンチ掘削を行ったところ、盛土をしていることがわかりました。おそらく調査区周辺に古い河道があり、その埋没後に低地となっていた場所に土を入れて整地を行ったと思われます。古墳の設計に合わせて土地の改変を行っていると考えられ、古墳の規格性が重要視されていたことがうかがえます。



8トレンチ全景垂直写真(右上が北)



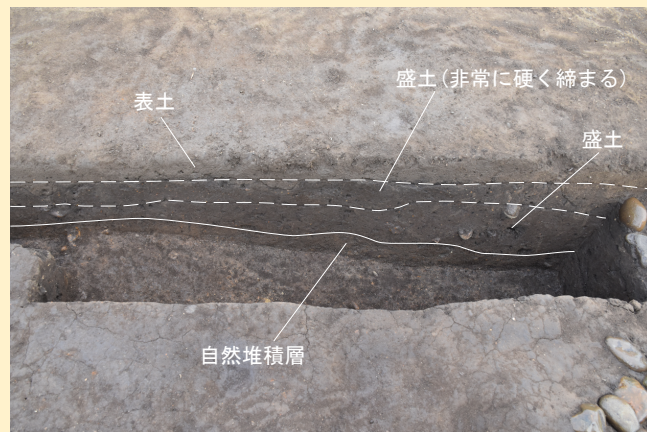
外堀の立ち上がり部分(北西から)



外堀埋土中の土器出土状況(南東から)



葦石の検出状況(南から)



中堤盛土の断面(北西から)

令和5年度の調査の概要

浅間山古墳の外堀については、過去の調査により後円部西側が広がる形になることが判明していました。これをもとに外堀の形状が左右対称であると仮定し、令和5年度に6・7トレンチを設定して調査を行いました。しかしいずれのトレンチでも外堀の立ち上がりは確認できませんでした。後円部北東側は6トレンチより内側で外堀が立ち上がるか、もしくは6トレンチまで浅間B軽石（1108年降下）の堆積範囲がみられることから周囲は低い地形が広がり、後円部西側の外堀と低地がつながっていた可能性が考えられます。この成果により、後円部西側だけが外側に広がる形状をしている可能性も考えられることになりました。

